

ディアコニア入門

H. コッコネン、宣教師

ノルウェールーテル伝道会

フィンランドルーテル海外伝道

初めての方々へ

この資料は、キリスト教会におけるディアコニアを学ぶための手本です。

これは、フィンランドルーテル教会を通して、1990年代に、ロシア（旧ソ連）から独立したばかりのエストニアで復活したルーテル教会のディアコニア活動を生み出すために依頼されたものです。

その後、フィンランドルーテル教会のディアコニア専門家が選ばれ、ユンズルグループと一緒に資料を編集し、早速エストニアのルーテル教会で1990年からまる1年間にいくつかのディアコニアセミナーが開かれました。

この教えの目的は、新しい思想やビジョンを、現代と将来のディアコニアに設定することです。この資料が自由に用いられ、それぞれの地域の必要な課題、および経験などが加えられても良いでしょう。

ところで私は、宣教師になる前にフィンランドルーテル教会でディアコニッセとして働いた経験があります。その後、1977年に日本へと遣わされ、今日まで西日本ルーテル教会のいくつかの教会でご奉仕させていただいております。途中、何度か帰国いたしましたが、1990年から、特に日本の地方教会におけるディアコニア活動を考えるようになり、帰国後、ディアコニアをもう一度勉強する機会が与えられました。そして1966年の春から丸4年間で、西明石ルーテル教会の奉仕とともにディアコニア資料作成の準備を始めました。その時、特に勝原洋子氏（旧沢伝道師）からいただいた翻訳は、何よりも大きな助けとなりました。こうして手に入ったばかりの資料は、教会の小グループなどで用いられましたが、いろいろと書き直す必要がありました。それは、私が2000年の夏に帰国する前まで続けました。このために、当時、神戸ルーテル聖書学院生の河道子姉が助けてくださいました。そして2004年に来日後、最終的にまとめました。

それではディアコニアの学びのスタートとして、聖書に基づき、またディアコニアの歴史から「ディアコニアとは何なのか・・・」という旅を始めましょう。それらに加えて、現代世界のために、教会内と社会的ディアコニア資料のために役立つようにと願っています。

とても足りない小さなディアコニア資料ですが、どうか主のお働きのために用いられますように祈っています。

2005年3月25日

ヒルッカ・コッコネン

目 次

<初めての方々へ>

I. ディアコニア入門.....	5
1. ディアコニアとは 「その本質について」	5
2. 信仰と愛.....	6
3. 愛の倫理的姿.....	7
4. ディアコニア活動の価値.....	8
① 様々な人間理解の学び.....	8
② キリスト教の人間理解のまとめ.....	9
5. 隣人への愛の姿 「良いサマリア人への譬えの学び」	10
6. ディアコニア活動の出発点.....	13
II. ディアコニアの歴史.....	15
「ディアコニアの紹介」	15
① エジプトによる隣人愛.....	16
② ギリシャの哲学者による隣人愛	16
③ 旧約聖書による隣人愛.....	17
2. 紀元後のディアコニア.....	19
① イエス・キリストのディアコニア.....	19
② 使徒時代のディアコニア	21
③ 初代教会のディアコニア	23
④ ローマ帝国教のディアコニア	26
⑤ 中世のディアコニア	27
フランシスコ・アッシジ「平和を求める祈り」	29
「今までの歴史のまとから未来へ」	30
① マルティン・ルターとディアコニア	30

② 敬虔主義のディアコニア	32
③ ヨーロッパ、ドイツのディアコニア	33
④ 北欧に渡るディアコニア.....	36
⑤ フィンランドルーテル教会のディアコニア紹介	38
⑥ フィンランドルーテル教会憲法によるディアコニア	39
⑦ フィンランドルーテル教会のディアコニア人の教育について	40
Ⅲ. 教会としてのディアコニア	42
1. 教会の主なディアコニアとは.....	42
2. 本来のディアコニアの働き.....	43
3. ディアコニアという言葉とは.....	45
4. 教会とは何ですか.....	46
5. ディアコニア活動についての細則.....	47
Ⅳ. ディアコニアの目標とその特徴について.....	49
1. 4つのディアコニアについて	49
2. カリタ的ディアコニア	50
3. 社会的ディアコニア	51
4. 福音的ディアコニア	52
5. ディアコニア的教育の養成.....	53

I. ディアコニア入門

1. ディアコニアとは — その本質について

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい。」

イエス・キリストは、旧約聖書のモーセ五書の中に書いてある「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記 6：5）、また「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ記 19：18）という二つの掟が「最も重要なダブル掟」だと言われました。イエス様は、十戒という神のモーセを通して与えられた律法を第一と第二の愛の掟としてまとめられ（マタイ 22：36-40）、聖書の全ての教えがこの二つの掟に基づいていると教えられました。なぜなら、聖書は、神を愛する人が隣人を愛するようになると教えているからです。「神を信じるようになった人々が、良い行いに励もうと心がけるようになる」とテトス 3：8に書いてあります。ですから、新約聖書に記されている「最も重要な掟」は神と人との隣人愛のつながりとして、ディアコニアという、仕えることの元となっているわけです。

神と人ともに仕えるという愛は、聖書のみ言葉から生まれてくる善い業です。イエス様は、このことを「ぶどうの木」という譬えを通して、次のように教えてください。

「ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（ヨハネ 15：4-5）。この譬えは、一方では、神様がイエス・キリストを信じる人々と共におり、彼らが実を結ぶようにと導いてくださることを教えています。もう一方では、クリスチャンたちは、聖書を読み、祈り、自分の教会の礼拝を通して奉仕に遣わされることを教えています。ですからディアコニアというのは、キリスト教会の日常生活の中で、具体的に表れてくる善い業です。

よい実を結ぶことは、信仰生活について表れてくるので、ヨハネ 3:16 に書き記されている御言葉は、まずディアコニアの本質を示しています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じるものが一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」わたしたちは神の愛、すなわち救いの恵みを自分のものとして受け取ってから捧げる心になっています。これこそディアコニアの姿であり、本質的なスタートです。クリスチャンは、イエス・キリストご自身がこの地上で行われた模範にしたがって、それと同じように人々を助けたいのです。マルティン・ルターは、「愛と喜びは、信仰からあふれ出てきます。その愛は、喜びを持ってどんな人であっても、報いを求めないで仕えたいだけです。」と言っています。

2. 信仰と愛

ディアコニアとはキリストの愛から出てくる行為です。この愛はどのように生まれてくるのでしょうか。それは神の言葉と聖礼典にある生きた力によるのです。み言葉にあるイエス・キリストは、神と人をひとつにするために、この世においでになりました。ヨハネ 1:14 に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と書き記されています。

キリストは、わたしたち人間の罪・弱さ・過ちを取り除いて、信仰によって聖霊、力を与えてくださいます。そして、わたしたちのものはキリストが与えてくださったものと交換されました。そういうわけで、イエス・キリストを信じる人は、神の愛を持つものとなります。愛とは、神様から与えられたプレゼントだけでなく、神ご自身が愛そのものです。そして、キリストが人の中に住むなら、その人はキリストの愛を持つことを通して、隣人に対するキリストのようになります。しかしそれは、この世に生きている間に完全にされているという意味ではありません。ただ信仰によって義と認められ、そして天国でそれを得るように歩んでいるわけです。（ローマ 3:23-25、5:1、フィリピ 3:9、12-14）

イエス・キリストはわたしたちに愛の模範を教えてくださいました。それによってわたしたちはいつもイエス様から学びつづけることができます。「キリストによる励ま

し、愛の慰め、霊による交わり、慈しみ、憐れみの心、思いを一つにする、ヘリくだつて互いに相手を自分より優れた者と考える」（フィリピ2:1-5）などのことです。そして神の愛は、軽蔑された無視された人々を愛するようにと願っています。ルターが一番美しく表現された教えは、次のようなものです。「罪ある者は、愛されているから美しいのです。しかし、彼らが愛されているのは、その本来の美しさのためではありません。」

3. 愛の倫理的姿

イエス・キリストのお教えになった黄金律と言う大切な教えは、旧新約聖書ばかりではなく、イスラム経典の中にも記録されています。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイ7:12）。こう言う訳で、ディアコニアそのものの教えを、他の人類愛の教えに比べることができます。偉大な宗教や哲学は、善悪と正しさと間違いとについて教えつづけています。また、キリスト教を知らない人々も、隣人に対して愛の業を行います。それはキリスト教会のディアコニアとは違った意味です。聖書はすべての人には他の人々を世話する能力があり、それは自然に人間に与えられていると教えています（ローマ1—2章）。しかし私たち人間には、善悪道徳的知識があっても、それを実行するのは全く別のことです（ローマ7章）。

ディアコニアというのは愛（慈善）の業です。感情的な愛がなく、義理だけのよい業もディアコニアでしょうか。聖書が教える愛は神から生まれてくるのですが、人は神の愛がなくとも、知識によって、他の人々のために必要な援助をすることができます。例えば、ある社会人や教会の働き人は、相手に対して愛を持たずに理想的な援助をすることができます。それは義理による善い業であり、またそれは、助けを求めている人にとって援助を受ける原理です。そういう理由で働き人（社会の人々、教会の人々）はその職業に従って、自分の国の文化や社会の習慣や命令によって仕事をします。そしてそのような助けられた人々も、特別な愛がなくとも援助を受けることができます。この世は義理による行為によってよく動いていますが、私たちクリスチャンはそれに従って報いを求めずに、神の清い愛によるディアコニアを願っております。

質問 義理によって、そして、一方的愛によって与える援助は、受ける側から見たらどのように受け取りますか。

4. ディアコニア活動の価値

創造者である神様は、今もなおそのお働きを続け、人間、自然、この世界を顧み、支えてくださいます。そして神は、イエス・キリストのあがないを通して、わたしたち人間に救いを備えてくださいました。神様は創造者、そして購い主として、わたしたちを新たにし、いやし、罪と死から解放し、ご自分のもとに立ち返らせてくださいます。そして、わたしたちと同じ姿をしてお出でになったイエス・キリストはわたしたちの弱さ、罪、困難、苦難をご自分のものとしてお受けになりました。そういう理由で、わたしたちもイエス様と同じように、隣人の過ちや罪や困窮を取り扱わなくてはなりません。こうしたディアコニアとは、キリストの名によるディアコニアであり、他の援助と異なっています。

ディアコニア活動を生み出す価値を考えると、キリスト教会の務めは神のみ言葉に基づいています。そういう訳で、教会の務めが一番深い目的は、福音を宣伝すること、そして同時に、互いの世話をすることです。（I コリ 12:26-27、ローマ 15:7）

① 様々な人間理解の学び

しかし、ディアコニア活動に影響を与えるものには、個人や各教会や社会や教会派全体が持っている宗教、道徳、美学、具体化、経済的などの価値観もあります。そして、わたしたち一人一人の、この世、人間、善悪、役に立つか立たないか、美しさと醜さについての考え方、あるいは、自分自身にとってよい人生とは何であるかというような考え方は、比べられないほど異なっています。

各教会のディアコニア活動は、互いの人間関係に応じて実行されます。それは一方で与え、他方では受け取る方法です。また対話、見聞きする存在の体験などです。その上それは、いろいろ問題やさしつかえを越え、それぞれの人生に良い結果を見出すため

に働くわけです。ですから私たちは、互いの人間関係や、日常生活に影響を与える原因を理解する必要があります。

ディアコニアとは、キリストの名による活動ですので、その人間理解も聖書のみ言葉によります。わたしたちは自分についても問いがあります。例えば、わたしたちにとって何が重要ですか。あるいは正しいのですか。また、私はどこから来たのですか。あるいは、何のために生きているのですか。また、過去や現在や将来についてさまざまな疑問が起こるかもしれません。キリスト教会の人間理解は、人間が自然の一部であり、そして肉体的な要求があるという自然主義の人間理解に賛成しています。しかし、そればかりではなく、人間は神の形に造られたので、精神と霊的な要求もあります。ですから、神様と人間との深い交わり（対話）をすることは生涯の中心となっています。

キリスト教と人文主義（Humanism）には同様の出発点があります。それは、人間には他の造られたものとは比べようのない価値があり、道具的なものではなく、かえって人は、知識、自由、責任を持ちながら、それぞれ文化や習慣を通して自分の人間性を現しているという事です。人文主義の人間理解によると、「神や自然よりも人間そのものの研究を強調し、その文化教養の自由な発達に非常な貢献をした。その理想を古代ギリシャ・ローマにおいたので、ひいては古典学の尊重となった」と The New Crown, English-Japanese Dictionary (620) に記述されています。人文主義は特に、ルネッサンス（文芸復興期、Renaissance）の時代から現代までにとっても大きな影響を与えています。そこから人道主義（Humanitarianism）なども生まれてきました。しかし、こうした人間理解に従う人たちは、自分自身の創造活動や自由に選べる可能性を信じています。しかし、私たち人間の心の中には罪があるので、私たちは聖霊様の照らしがなければ、自分の力で善悪の別を知ることができないのです。

② キリスト教の人間理解のまとめ

それではこの学びの結論として、私たちクリスチャンは、聖書が教えている次のような人間理解を信じていることをまとめましょう。そのある部分は、私たち自身の経験にもかなって、そこから自分の証しすることもできます。

- 人間は神に造られました

- 人間は神の形に造られました
- ところが人間は、神に対して罪を犯しました
- この人間は、神にあがなわれ、神と人間との交わりが回復されました（それはもちろん、隣人や自然との調和も回復したという意味です）
- 人間には、その生の意味、また生きがいや目的、目標があります
- 人間には道徳的・倫理的責任が課せられています
- 私たちクリスチアンの本国は天にあります（フィリピ 3：20）

質問

- ① ディアコニアの務め、つまり目標や目的、それらの意味を考えましょう。そしてディアコニアはあなたにとって、どのようなことが大切だと考えますか。
- ② 私は神の形であり、そしてあなたも神の形であるという事実は、あなた自身にとって、日々、どんなことを意味していますか。
- ③ 助け合うことの目的として、あなた自身にとって何が一番重要ですか。

5. 隣人への愛の姿 良いサマリア人への警えの学び

イエス様は、ルカによる福音書の 10:25-37 に書き記されている「良いサマリア人」の警え話を通して隣人愛とは何であるかと印象深く教えておられます。わたしたちは、良いサマリア人の警えからたくさんのディアコニアを学ぶことができますが、決して救いの手本として用いてはいけません。救いとは行いによらずに、ただイエス・キリストの十字架のあがないによるのだから。それでは、良いサマリヤ人の警えの 25-29 節を読みましょう。

イエス様のこの警えによる教えは、ユダヤ教会のある律法の専門家の質問に対する答えなのです。彼の質問は大変賢そうに見えますが、彼の目的は、自分の正当性をイエス様に示すことでした。彼は律法の内容を世の他の人々よりよく知っていたかもしれませんが、彼はかえって、自分の心の問題をイエス様に現したのです。それでイエス様は、今度は彼に、律法を実行しなさいと言われ、試されました。実は、神と隣人を心から愛そうと思う人は、自分自身には愛が全くないとか、それは不完全であるということに気づきます。けれどもこの律法の専門家は、自分自身を悟らずに、「では、わたしの隣人

とはだれですか」というように次の質問に入りました。それでは譬えの 30-37 を読みましょう。

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通っていた。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取りだし、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

譬えに出てくる二人のユダヤ教会の働き人は、テキスト中の律法の専門家ばかりでなく、わたしたち全ての人間の生まれつきの心の状態を示しています。突然の出来事でしたが、死にそんな人を助けようとしなかったことは、もちろん彼らにとって律法を破ることになりました。彼らはそのとき、神様ご自身に対して、また隣人に対して、罪を犯してしまいました。聖書はこのことについてこう教えています。「正しい者はいない。一人もいない。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」（ローマ 3: 23-24）。ですから私たちは、この譬えの良い人の行いについていこうと思うなら、それができるようになるのは、イエス・キリストの贖いによる罪の赦しを通してのことです。私たちは、クリスチャンになっても、罪を犯してしまいますが、同時に、イエス・キリストによって清められますので、良い行いのために用いられています。

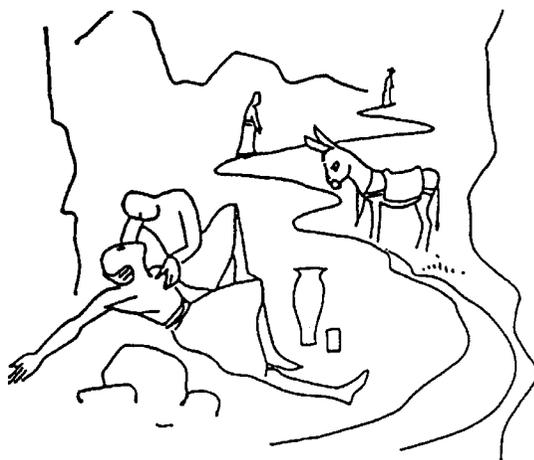
それでは、良いサマリア人の譬えについてのディアコニアの実際を少し考えてみましょう。譬えの人も旅行中でしたが、彼は前の人々と違って、直ぐに道ばたに倒れていた人を助けようと思いました。彼はその人を見て、彼のことを自分の隣人として受け入れました。彼の「側に來ること」や、「人を見る事」や「哀れに思うこと」などは、隣人愛を持つ心を示しています。彼自身にも、追いはぎに襲われる危険性があつたにもかかわらず、怪我をした人を中心に、できるだけの援助を始めました。彼は、自分自身の

ことを忘れて、困った人の立場に立つことができたことによって、ディアコニアをする人になりました。

警えの学びを続けると、良いサマリア人は、「半殺しにした人の傷に、油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した」と書いてあります。その上、彼は、宿屋の主人にも介抱するようにと頼みました。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら帰りがけに払います」。こうして警えの良いサマリア人は、自分のすべてを、その隣人のために捧げるようになりました。しかし、これは、警えです。良いサマリア人のケースは、まず、イエス・キリスト御自身の完全な愛を示しているのです。それにしても、この教えは、私たち一人一人にディアコニアができるように、隣人愛を教えています。そしてイエス様は、この話の中の律法の専門家に、この警えの結論として、「あなたは、この3人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねると、彼は「その人を助けた人だ」と言った。そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい」(36-37)。イエス様は、聞く私たちにも、これと同じようにおっしゃいます。「あなたも自分の隣人を助けるように出ていきなさい。」

質問

- ① このサマリア人の援助について、個人的レベルでの助けをまとめてください。
- ② 2人の神殿祭司者は、どうして具体的援助ができなかったのでしょうか。何でもあげてみてください。
- ③ 私たちの今までの人生を繰り返して、瀕死の状態に置かれたことがありますか。また、あなたにとって忘れられないサマリア人の援助とは何ですか。



6. ディアコニア活動の出発点

イエス様は、この良いサマリア人の譬えを通して、ディアコニアの実際ばかりでなく、ディアコニア活動の出発点についても教えてください。前にも書いてあるように、ディアコニアは、隣人の要求を見てから始まるということです。ですから、「ディアコニアの第一の出発点とは、困った状況の中にいる人を助ける決心をすること」です。それは、ディアコニア現実的スタートです。行為はその後についてきます。

譬えの良いサマリア人は、その隣人に対して必要な手当てができるために、自分自身に対する危険性さえも忘れてしまったようです。彼の愛の行為は、優しい態度ばかりではなく、個人的な献げ物や苦勞が伴いました。私たち仕え人のディアコニアも、自分の利益や報いを求めずただ助けあげるのです。

しかし、多くのディアコニアの要求の中からできる援助を選ぶ必要があります。フィンランドルーテル教会憲法によりますと、この出発点について、次のように書き記されています。「まず、一番困った状況の中にいる人を先に助けなければならない」ということです。もう一つは、「外の人々（方法）からの助けを全然もらっていない人から援助を始めなければならない」ということです。（フィンランドルーテル教会の憲法によるディアコニアの紹介は、後に出てきます。）ディアコニアの場合は、個人的レベル、あるいは教会からの行為ばかりでなく、社会的や国際的な責任もありますので、様々な効力や将来的プランが必要です。個人や教会からの援助が十分できない場合、困った人を助けることができる場所を探し、そこへ案内して導くことなどは、ディアコニアの大切な役割です。譬えの良いサマリア人は、半殺しの人を宿屋まで連れて行って介抱するように願いました。その上、彼は、かかった費用をも全部宿屋の主人に支払うように約束しました。この譬えは、神様御自身の愛を示していますが同時に、それは私たち一人一人に、隣人に仕える模範を示しています。

良いサマリア人のケースは、ディアコニアの目標についても教えてください。私たちは、どんな人であっても、その人の立場に立って、相手を喜ばせるように助けたい心です。ですからディアコニアの出発点は何よりも心の態度から始まります。そういう訳でイエス様は、愛のダブル掟の内容を次のようにも教え続けられます。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイ7:12）。この黄金律は自ら、自分の経験を通して、相手の立場が分かるようにと教えてください。

私たちクリスチャンの質問は、「私の隣人とは誰ですか」という自分自身のために「隣人」を捜すのではなく、むしろ逆に、「自分自身は、誰に対して隣人ですか」と質問すべきでしょう。これこそディアコニアの行為の出発点ですが、良いサマリアヤ人の譬えは、何よりもディアコニアの基にある神の愛について教えています。そして神の愛がイエス・キリストの生涯と宣教を通して示されています。キリストの苦しみが私たち人間の身代わりとなり、私たちを罪の報酬から解放してくれます。ですから神の愛は、イエス・キリストの贖いによって実現されます。つまり、神の愛は、イエス・キリストが十字架の上で私たち人間の罪を負い、死んでくださったことを通して救いの完全さを示しています。そして神の愛が、イエス・キリストのみ救いに預かっている人の心の中に入り、そこに住むようになります。ですから、良いサマリア人の譬えの人は、このような清い愛を持って、直に可哀想な人の立場が解り、助け上げました。

さらに付け加えますと、ディアコニアは、神様に捧げられた感謝のことです（Ⅱコリ 8:12）。捧げる人は、助け合うことができることを、主に感謝します。そして、助けられた人の心の中でも、イエス様に対して感謝するようになるかもしれません。（Ⅱコリ 9:11-13, 使徒 2:43-46, ローマ 10:8-10）

また言葉を変えますと、ディアコニアとはただの働きではなく、教会の生き方です。目に見えない信仰が、愛の業を通して現されています。それは、信仰が具体的な状態で現れることです。そういう意味で、ディアコニアはクリスチャンがすべき義務であり、特徴です。「キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです」（Ⅱコリ 5:14）。

しかし、ディアコニアには、その一つのケースに対して、いつまでも続けられません。援助を必要としている人、または、家族全員がその助けによって普通の生活に戻ったようになると、ディアコニアの必要性がなくなります。また援助を受けている人自身は、自分の為にも、できるだけ責任を持たなければなりません。私たちは、様々な経験や訓練を通して、互いに愛の業に励まされれば、ディアコニア活動もますます広がっていくことでしょう。

Ⅱ. ディアコニアの歴史

ディアコニアの紹介

キリスト教会のディアコニアとは、旧約と新約聖書における、あらゆる苦難している者に仕えることです。そうした助けは霊的であり、内面的であり、物質的であります。

ディアコニアの歴史とは、人間が存在してきた歴史の苦難の説明です。それがキリスト教会の今までの時代・世紀を通して、どのような形でキリストの愛による顧み を具 体化したか、これがディアコニアの歴史です。ですから、ディアコニアの歴史は、人々が何を見たか、何を聞いたか、何をしたか、ということです。（例え ば、マザーテレサの働きという愛の業は、ディアコニアの歴史です。）ディアコニアは危険性を越えて、愛の業のために自分自身を捧げることなのです。この ように一人の人の歩みは、まさに、ディアコニアの歴史なのです。そして、彼らのそのような行為を通しての証しによって、この世はさらに良くなり、彼らの働 きは次代に、そして現在にまで引き継がれています。

それでは、キリスト教会が始まる前の様子について、紀元前のディアコニアを紹介 します。



1. 紀元前のディアコニア

① エジプトによる隣人愛

愛の業がキリスト教会に生まれる前に、東方のある国々の生活で行われていました。例えば、エジプト、イランの一部、特にエジプト人の墓に納められていた文献に、飢えた人に食べさせたこと、渴いた人に水をあげたこと、裸の人に何か服を着せたというような文章が残されています。その上、敵（不都合な人）にも、また招待していない客や他国人の客にも食べさせなさい、とあります。この中には、貧しい人への配慮や、一晩宿を貸すこと、道案内をすること、囚人のために祈り助けること、病人の手当てをすること、亡くなった人の葬りを丁寧にしてあげることなどが記されています。ヘインツ・ヴォンフォフ（Heinz Vonhoff）は「*憐れみの歴史はナイルの国から始まった*」と言っています。

② ギリシャの哲学者による隣人愛

人間を神のように唱えていたギリシャ・アンテオケの哲学者たちは、人間らしく相手を取り扱うことの基礎を築きました。ただしギリシャの神々は、憐れみを持たず、提供もしません。つまり、その神々は、悩みのうちにあり苦しむ人に我慢を強いて、耐えて生きることしか教えません。なぜなら、憐れみを内に持っていないからです。このギリシャの神々は、調和を特に重んじました。貧しさや病気は日常生活では当たり前のことであり、奴隷は奴隷として人間の道具として生まれ、そのものらしく生きていくことが善だとみなしていました。

このようなわけで、貧しい人を助けることは無駄のように考えられていたため、弱者援助に力を入れる必要などありませんでした。そのため、貧しい人や病気の人 は疎外され、元気な人だけが大切にされました。物乞いや貧しい人、障害者たちは、社会の調和を乱すものとして邪魔にされ、社会から退けられました。しかし、社会の雰囲気とは別に、個人的レベルでは善良な人々があり、憐れみ愛は生きていました。

この時代の特色は、人間が少しずつ人間について理解し始めるようになったことです。しかし同時に、聖書が教えている隣人への愛は、まだまだ明らかに出てこないということも事実です。作家プラウトゥス（Plautus、紀元前 184）は、「どうして私たちは貧しい人に寄付するのですか。私たち自身は財産を失うのに、貧しい人の生涯が長くなるなんて…」と言い残しています。また他の哲学者たちは、「他の人に仕えなければならぬとしたら、人間はどうして幸せになれるようか」とも問いました。自由と知恵を身につけた古代ギリシャ人の愛の業についての考え方は、まるで自己中心でした。

また、イエス・キリストの時代の哲学者セネカ（Seneca、紀元前 4-紀元後 65）は、憐れみを注ぐ問題について、次のように考えました。「善い業を、頭の中で考えれば十分です。」かわいそうに思うことは自分の誇り（自慢）から生まれてくることなのです。

「助けてあげないと自分自身に対して恥となる…」と愛情がなくて、「ともに泣くことはできない」という考え方でした。ですからセネカの考えによりますと、助けることも助けぬことも、自分で決めるだけでした。決してかわいそうに思って動いたということではなかったようです。この時代のローマでは、何か大変な災害がありました。そのとき、被災した人に援助の手を差し伸べたのは、ローマ皇帝と専門家でした。それはかわいそうに思うというより、上層部の権威ある人々が相談して行われたものでした。人々が互いに兄弟として助け合うことは理想だけでも、自分たちはプライドによって援助の手を差し伸べます。それでも当時の人々の中には、個人的にかわいそうに思い、援助の手を差し伸べていた人もいます。

③ 旧約聖書による隣人愛

イスラエルの民によってなされた憐れみの行為は、前述のような哲学者や国の指導者ではなく、聖書に現された神ご自身が教えられたものです。隣人愛の教えは、天地の創造者からモーセという人物を通して与えられたものです。それは、十戒（出エジプト記 20 章）に書き記されています。十戒は、次のように二つの部分にまとめられています。それは、「あなたは心を尽くし、魂をつくし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記 6:5）と「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ記 19:18）です。

神様はイスラエルという国を一人の人からつくり、ご自身のために聖別されました。ですから、神の国の人々は、まず、「あなたには、私をおいてほかに神があってはならない」と出エジプト記 20:3 に書いてあります。それから、神様はその民に、正しい歩みを次の例のようにも教えてくださいました。「奇留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で奇留者であったからである」（出エジプト記 22:20）。また、「寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない」（21）。イスラエル人たちは奇留者ばかりでなく、奴隷の経験もあったので、みずから、すべて苦しんでいる人々の「気持を知っている」と出エジプト 23:9 に書き加えています。

その上、神様は、イスラエル人に隣人愛について詳しく教えてくださいました。特に、レビ記 19 章にお金を貸すことや、食べ物や着るものや住む場所などを用意するようにと書き記されています。例えば、「ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これは貧しい者や奇留者のために残しておかねばならない」（10）。また、奇留者とともに仲良く住むようにと礼儀正しいことや心の態度についても教えてくださいました。「白髪の人の前では起立し、長老を尊び、あなたの主である神をおそれなさい。」（レビ記 19:32, 33-34）

また、神様はご自分の民を、預言者などを通して悪い生き方についてお叱りになりました。「お前たちの咎がどれほど多いか、その罪がどれほど重いか、わたしは知っている。お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り、町の門で貧しい者の訴えを退けている。それゆえ、知恵ある者はこの時代に沈黙する。まことに、これは悪い時代だ」（アモス 5:12-13）。また、予言者イザヤは「神に喜ばせる断食」、主従う道について、力強く教えてくださいました。（イザヤ 58:6-7）。その上、ヨブ記も、その時代において、旧約聖書の社会的な状態や憐れみの行為を詳しく説明しています。

旧約聖書時代に与えられた愛のダブル戒め（神をまず、第一に愛しなさい。またあなたの隣人を自分と同じように愛しなさい。）は ディアコニアの土台となっています。そして、ここでいわれる隣人愛は、神への感謝を表しているのだと教えられています。そのように従う人には、主からの祝福が与えられました。しかし神の民は、他の人と同じように罪深い者でした。ですから神様は、時代から時代へ、預言者たちなどを遣わし、その民に正しい道を 教えてくださいました。旧約聖書のこうした教えは、他のすべての国や人たちに神様が望んでおられる例となっています。

2. 紀元後のディアコニア

ここでは新約聖書における、イエス・キリストのディアコニアと、使徒時代のディアコニア、それから初代教会（約 70 年からニカイア総会議 325 年まで）とローマ帝国教のディアコニア、また中世のディアコニア（約 15 世紀まで）を紹介しましょう。

① イエス・キリストのディアコニア

イエス・キリストの時代は、イエス様の生涯、つまり、死とご復活を通して、新しい時代が始まりました。しかし、イエス・キリストのこの地上での働きは、その 教えにおいても、行いにおいても、何よりもディアコニアの歴史です。イエス・キリストの愛の御業は、すべての時代の人々のために偉大な模範となっています。

イエス様時代の聖書は旧約聖書でした。イエス様ご自身は、ユダヤ教会の戒めをすべてお守りになりました。また旧約聖書は、イエス・キリストご自身について語るばかりでなく、御言葉が彼によって成就されると教えています。例えば、イエス様がある日、出身の町ナザレの会堂でイザヤ書 61:1-2 に書いてある預言を語ってくださった時に、その言葉が実現されたとルカによる福音書 4:21 に書かれています。またルカの 4:18 のイザヤ書からの引用箇所にも、イエス様の宣教の内容と目標が書いてあります。わたしたちは、この箇所からこそ、イエス様のディアコニアの意味と目的を深く学ぶことができるのです。（イザヤ 61:1-2、ルカ 4:18-19、マタイ 11:4-5）

しかし、イエス様はディアコニアの意味を、もう一つのみ言葉を通して最もすばらしく教えてください。それは、イエス様がご自身について言われた「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように」という御言葉です（マタイ 20:28）。イエス様は、ここで「仕える」という言葉に 2 種類の意味を与えて教えてください。その一つは、イエス様はわた

したち皆のためにご自分の命をささげるということであり、もう一つは仕える模範を示してくださるということです。

こういう訳で、仕えることは、イエス様を信じることの実であり、決して自分の力によるものではありません。仕える・ディアコニアとは、イエス様の愛と信仰のゆえに与えられた賜物だからです（エフェソ 2:8-10）。言葉を変えれば、自分の罪が赦されたという宣言は、ディアコニアを生み出す力になります。ですからディアコニアは、いつも礼拝と聖餐式によって始まります。そして、イエス様が私たち一人一人を愛してくださったのと同じように、私たちもイエス様の模範に従って「互いに愛し合うべきです」。「互いに愛しあいなさい」というのはイエス様ご自身がお与えになった新しい戒めです（ヨハネ 13:34-35）。

イエス様は、12弟子を呼び集めてから、人々を教え始められました。その教えの中に、ディアコニアを表す有名なたとえ話があります。例えば、イエス様は、放蕩息子のたとえ（ルカ 15:11-24）を通して多くのことを教えてくださいます。放蕩息子は財産だけでなく、自分自身をも失ってしまったのです。これは私たちの昔の姿ですが、幸いにお父さんが彼の帰りを待っていました。このお父さんの忍耐深い愛と赦しは、天のお父様を示しています。また、よいサマリア人のたとえ（ルカ 10:25-37）を通して、イエス様は憐れみや勇気や犠牲愛をお語りになりました。

イエス様は多くの人々をいやされました（マタイ 15:28-31）。それは肉体的ないやしばかりでなく、同時に心もいやされました。「あなたの罪はゆるされました。床をたたんで…」（マルコ 2:5、10-12）また、イエス様は、その弟子たちにも、人々をいやし、悪霊を追い出す権威をお与えになりました。12弟子の他にも、イエス様に従う多くの人々がいました。彼らもイエス様の働きを助ける奉仕をしていました。また、女弟子のことも出てきます。彼女たちはお金を捧げ、自分の家を開き、貧しい人々を助けました。

さらに、イエス様は、最後の晩餐の席で、弟子たちの足を洗われました（ヨハネ 13:1-15）。また、世の終わりの裁きについてのイエス様の教えの中に、ディアコニアのことが記されています（マタイ 25:31-46）。

そして、イエス様の福音と愛の行為は全人類にまで及びました。

② 使徒時代のディアコニア

使徒とは、イエス様の12人の弟子たちとパウロのことを言っています。使徒たちはイエス様の復活の目撃者なので、彼らの書いた証しは新約聖書の中心となっています。しかし、その働きの中には、仕えることや兄弟愛についての教えや行為もたくさんあります。ヨハネという弟子は、使徒時代の教会について次のような証しをしています。「わたしたちは、自分が死から生命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです」（Iヨハネ3:14）。

使徒時代の教会の「信者たちは、皆一つになってすべてのものを共有にし」、大家族のような生活をしていました。彼らは互いに世話しあい、おのおのの必要に応じて皆が財産や持ち物を分け合いました（使徒2:42-47）。しかし、財産の分かち合いは自由になされ、決して強制ではなく、公平でした（使徒5:1-11）。

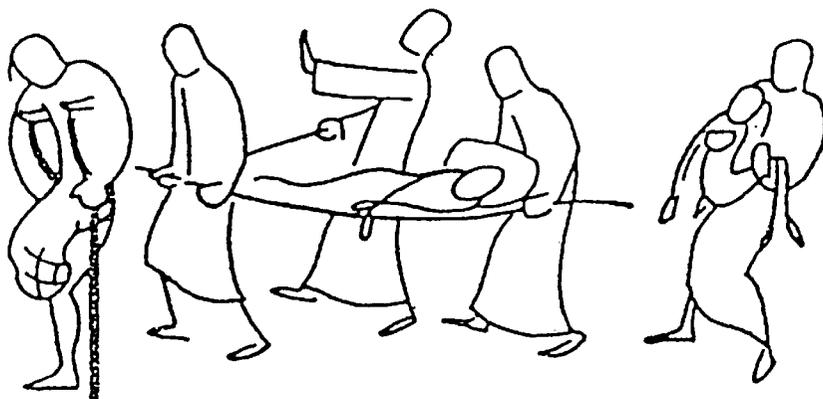
使徒時代の教会の食事は、皆が準備し、愛餐会と聖餐式のようなものでした。そして信者たちは、集会が終わってから、礼拝に参加できなかった人々に食事を持って行きました。これは、貧しい人々や教会へ来られない人々への配慮というディアコニアです。当時、司式とディアコニアは、同じように教会生活の中心となりました。その後、使徒時代のキリスト教会がますます成長していき、弟子の数が増えてきたため、新しい奉仕者の必要が出てきました（使徒6:1-7）。使徒たちは自分の奉仕に専念するために7人の奉仕者を選びました。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない」（使徒6:2）。しかし当時選ばれた7人は、まだ仕え人（ディアコノス）とは呼ばれていませんでした。その理由は、彼ら（ステファノ、フィリポなど）が使徒たちと同じように、み言葉を宣伝える人であり、新しくできた教会の指導者であったからです。

ディアコニアという務めがいつ始まったかということについては、まだ明確にされていません。けれども、使徒パウロの手紙（フィリピ1:1）に、監督と奉仕者の務めが出てきます。パウロは監督と奉仕者たちにいろいろな勧めを書き残しています（Iテモテ3:1-13）。奉仕者の中には女性もいました。パウロはフェベ（Foibe）という最初のディアコニッセのことをこのように紹介しました。「どうか、聖なる者たちにふさわしく、また主に結ばれている者らしく彼女を迎え入れ、あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けてあげてください。彼女は多くの人の援助者、特にわたしの援助者です。」（ローマ16:1-2）

使徒時代には、寡婦たちも、貧しい人や病気の人々の世話をしました。60歳以上になった寡婦たちは、もてなしの経験者でした。この奉仕を継続したい場合は、主に信頼し、良き祈り合いの奉仕や女性間のカウンセラーをしていました。寡婦たちの奉仕により、囚人たちや子供の教育や養育、病人の世話をする印象深い物語が今日まで語り伝えられています。（Iテモテ5:3-10）

ディアコニッセと寡婦たちのほかに、婦人弟子のことが新約聖書の中に書き記されています。例えば、タビタという手仕事の女性が、「たくさんの良い行いや施しをしていた」と使徒9:36に書いてあります。それから紫布を商う女性リディアのことも出てきます。彼女は注意深くみ言葉を聞き、その家族のメンバーと共に洗礼を受けたあとに、すぐ自宅を宣教のために開放し、提供したと使徒16:14-15、40に書いてあります。

パウロのIIコリ8-9章にも、施しの奉仕について詳しく書いてあります。特にマケドニアの諸教会の人々は、自分が貧しいながらも、喜んで豊かな施しをしていました。それは神様が彼らに豊かに恵みを与えてくださったからです。マケドニアの諸教会員は自ら進んで、精一杯の「慈善の業と奉仕に参加させてほしい」と願っていました。彼らがまず主を思い出して、神の御心にそって自分たちも自分自身を捧げたこと、そして実行したことは、今でもディアコニアの原点であり、学ぶべき大切なポイントです。彼らの行為の目的、熱心さの原因は、救いから来たものです。具体的に彼らは何をしましたか。彼らは主の日に献金を用意しましたが、それは自分たちが貧しいにもかかわらず、喜んで捧げたということなど書かれています（IIコリ8:1-6）。



③ 初代教会のディアコニア

初代キリスト・教会の歩みは70年から300年のはじめまでに存在していると思われています。クリスチャンに対する迫害が起こった時代以降、教会生活の歴史を残す資料がばらばらにされていきました。（あるところでは、現存する資料が希薄なため、詳しいことが今でも分かっていません。）しかし、教父による諸文書や、教会を反撃する者たちが残した資料によって、当時の人々の信仰や愛の業や献身ぶりについていろいろ思い起こすことができます。例えば小アジアの有名な総督プリニウス (*Plinius II*, 62-113) から皇帝トラヤヌス (*Trajanus*, 98-117) への手紙で二人の若い女性、すなわちディアコニッセについてこのように書き記されています。「彼女たちに迫害の手を伸ばしても信仰によって留まっていますが、それは「もっともいかがわしい得体の知れない魔術的な信仰だった」と書いています。

そして次の別の例ですが、アテネ人の哲学者アリステレス (*Aristeles*) が約140年、皇帝アントニウス・ピウス (*Antonius Pius*) に送った手紙の中に、クリスチャンの迫害についてもっともまとめられた説明が書き残されています。アリステレスは、クリスチャンたちが互いに愛し合うことや、寡婦たちを軽蔑しないことや、孤児を守ることを語っています。その上クリスチャンたちは、異国人さえも、まるで兄弟のように、泊めて食事を与えました。たとえ、自分の食物がない場合には、断食をしてまで客人をもてなしたケースもあります。

120年ごろの「使徒の教え」という文書によると、ディアコノスとディアコニッセは、教会から選ばれて、監督と共に親しく働いていたとあります。また、2世紀の監督イグナティウス (*Ignatius*) の手紙 (115年ごろ) の中では、三つに分けられた教会の務めの事が何度も繰り返し出てきます。それは① 監督の務め、② 長老の務め、と③ ディアコノスです。イグナティウスによると、ディアコノスたちは食卓の奉仕だけではなく、主イエス・キリストの僕として、完全な責任者であります。また、彼は、教会の奉仕者について次のように書いています。「監督は父を示し、長老は神の議会や使徒の契約を示しています。」また、ディアコノスとディアコニッセたちは、「聖徒の門番であり、主の僕だ」ので、彼らをもイエス・キリストのように尊敬するようにと書き残しています。

また、200年ごろの使徒的文書には、ディアコニッセの按手の様子などが書き記されています。こうした按手式は、礼拝の中で行われました。少し説明します。例えば、按手を受けるディアコニッセは祭壇にひざまずき、監督と牧師が彼女の頭の上に手を置き、按手の祈りをしました。それから、ディアコニッセの肩にストールがかけられました。それは、キリストの霊的なくびきを負うことの表明でした。「主のみ心の服で、あなたがおおわれますように」と祈りが捧げられ、指輪とか飾りが与えられる地方もありました。最後に聖餐式を済ませて終了です。

3世紀の中旬頃に北アフリカでひどい疫病が流行したときに、教会に反撃する人々はクリスチャンになった人々に対し、これは神罰だと訴えました。反対者たちは「神々が新しい宗教に対して怒って、罰を下された」と言いました。監督クプリアヌス (*Cyprianus*) は、自分の教会員と一緒に、クリスチャンばかりではなく、異国人をも世話し始めました。こうした助けが教会や社会の中で模範となり、人々は彼らを模倣していきました。また、葬式を出すことも、彼らの援助の一つでした。そしてあるクリスチャンは、強盗に捕らえられ奴隷になる仲間に対し献金を募り、奴隷状態にあったそのクリスチャンを助け出しました。その上彼らは、囚人の身代わりに自分が奴隷となったケースもあったようです。

初代教会のクリスチャンたちが助ける対象としたのは、特に迫害時代に、寡婦と孤児でした。また、病人や囚人たちの世話も当然行いました。その上、奴隷たちへの奉仕もたくさんありました。ディアコニアの働きの中には、貧しい人々の葬式を出すこと、そして埋葬と墓地管理が含まれていました。彼らの援助の中心は、金銭や衣服提供、また食物の配給や仕事探しや雇用などの数多くの働きでした。しかし、こうしたディアコニア活動は、外面的な援助ばかりではなく、霊的な助けも中心的でした。

ディアコノスやディアコニッセたちは孤児の世話をしたり、貧しい人を訪問したり、弱っている人々を支えたりしていました。またある場合、ディアコノスたちは礼拝の門番をしたり、朗読者であったり、讃美のリーダーをしました。また、捧げ物を集め、聖餐式のときにも手伝いました。そして礼拝終了後、聖餐を囚人や欠席者のところまで持って行きました。それに加え、ディアコノスとディアコニッセたちは、受洗クラスのために教えをし、受洗式に手伝いました。また彼らは、教会の管理者（財務、経済、運営）としての責任も持っていました。

ディアコニッセたちは、監督とディアコノスたちと共に働きましたが、ディアコニッセは主に女性の間で働き、カウンセリングなどをしました。ディアコニッセたちが特に力を発揮したのは、何か問題が生じたときで、監督とディアコノスの間にあって、その援助体制がスムーズに行くように、良き仲介の業をしました。ディアコノスとディアコニッセは、監督の耳、目、口、心そのものとして働きます。ですから、監督が自ら彼らを選びました。

ディアコノスとディアコニッセは、囚人たちに御言葉や物語を読み聞かせたり、悲しむ人々の慰め手となったり、病人や、誘惑されて人生を台無しにした人々のために、主のカウンセラーとして働きました。しかし、彼らの主な務めは、このような状況にある人々を探し出し、援助の手を差し伸べることでした。なぜなら、困難な状況に置かれた人々は、社会の目から隠されていたからです。ですから彼らは、その人々の家を訪問したり、必要なところで世話したりしていました。監督 テルトリアヌス (*Tertullianus*) はディアコニッセについて、このような証し残しています。「彼女たちは、接する人間の心の内面を実に良く理解します。例えば、一人の人間の喜怒哀楽や本音が手に取るように見えるのです。」

最後に一人のディアコニッセを紹介します。368年生まれのオリンピア (*Olympia*) は異邦人で良家の子女でしたが、彼女はまことのディアコニッセの模範であったといわれています。オリンピアは監督クリソストムス (*Krysostomus*) のもとで、コンスタンティノポリスというところで多くのディアコニッセといっしょに働きましたが、彼女の働きが一番人々の印象に残っています。

歴史家エリック・ベイリューサー (*Erich Beyreuther*) は、初代教会のディアコニア・愛の行為についてこのように語っています。「この4世紀のディアコニアシステムは実にすばらしいものであり、また一人一人の愛の実践は熱心で、その愛の業は広く伝えられていき、世界に多くの影響を与えました。これ以後、教会のディアコニアシステムは、この当時のものに勝ることはありませんでした。」

④ ローマ帝国教のディアコニア

初代キリスト教会がますます広まり、良き証し行為を通して、迫害されていた人々自身に対する影響も起こり始めました。クリスチャンたちの生き生きした信仰の実ばかりではなく、社会的な立場も変わってきていました。

300年代には、ローマ帝国のほとんどの地域に教会が建てられていました。そのころのキリスト教会の力と成長を示しています。そのころ、200年以上キリスト教会に対して続けられた迫害が終わり、初めて自由になったことはなんとも言えない大きな変化でした。この変化はコンスタンティヌス大帝 (*Konstantinus*、在位 306-337) がローマ帝国を支配していた時のことでした。コンスタンティヌスは帝国の将来はキリスト教と結ぶことであると確信し、312-312年の間にキリスト教を合法宗教としました。

コンスタンティヌス大帝は最初にキリスト教を公認しただけでしたが、唯一の国教となったのは、コンスタンティノポリスで325年行われたニカイア会義 (*Nikea*、325年) を通してのことです。コンスタンティヌス時代のある文書に、クリスチャンたちは迫害から守られたが、困窮者、弱者の存在はなくならなかった。その貧困は4世紀のローマ帝国の社会問題となったと書いてあります。帝国には貧しい人々や病人や囚人など苦しむ人が満ちていたようでしたので、コンスタンティヌス大帝自らキリスト教会の隣人愛に見習って、貧しい人々を助ける方法や旅人のための宿屋を設けるようになりました。

国教になったキリスト教会の側から見ると、当時の宗教の自由さや国家関係から許されたことは、教会の働きにとって大きなチャンスが与えられました。例えば、キリスト教の教職者に税金から給与が支払われ、教会に財産を保有する権利、そして市民の義務などが与えられました。また、日曜日は法律的な休みとし、クリスチャンにも政治的な権利、義務なども許されました。キリスト教会は、その新しい立場によって、ローマ帝国の支配を受けるようになってから、前よりもっと組織的な教会に変わり始めました。そして、その時代以後、国家と教会との宿命的な関係が始まりました。

しかし、キリスト教会に対して様々な反対運動も起こり続けました。例えば、コンスタンティヌス以後、ユリアヌス (*Yulianus*、在位 361-363) のみが異教を復活させようとし、またキリスト教徒を迫害しましたが、キリスト教会者の隣人愛の行為は、もう、

ローマ帝国の市民生活や異宗教の中にまでも深く影響していたので、ユリアヌスの運動は成功しませんでした。

テオドシス I (*Teodosius* 在位 379-395) は 380 年に「*公同信仰令*」を、380 年に発生して、キリスト教を帝国の唯一の国教とし、異教を禁じました。ディアコニア活動も安定の中で続き、多くの修道院などが発展していきました。テオドシウス後、ローマ帝国は自然に東ローマと西ローマに二分され、それぞれの歩みを始めました。その間、ローマ帝国に対して 375 年に始まったゲルマン民族移動以降、民族移動の動きがだんだん大きくなりました。迫害から解放されたキリスト教会は、コンスタンティヌス大帝の時代から 568 年のイタリア民族移動までの約 300 年間、急速に成長発展して、中世に向かって移行します。(ディアコニア・その思想と実践、門脇・聖子、1997 年第 1 出版印刷、70-71)

⑤ 中世のディアコニア

キリスト教会が長い迫害時代を乗り越え、公に認められたのは 4 世紀のことでした。そして、使徒信条をはじめとして、様々な組織が形作られていきました。ところがそれから 100 年ほどの間に、ディアコニッセに関して大きな変化が見られるようになりました。総会議は、5-6 世紀ごろから教会内のディアコニアの行為を禁じられました。そのうちの一つは、ディアコニッセの按手が禁じられたということです。60 歳以上の寡婦たちの奉仕も全く禁じられてしまいました。また、ディアコノスとディアコニッセたちの務めも西ローマ帝国のキリスト教会から徐々に少なくなり、当等、ディアコニッセたちの姿が消えてしまいました。ディアコノスたちの立場は継続されましたが、彼らの働きはもう愛の使者としてではなく、教会内の礼拝組織（司式者）のみとなっていました。

7 世紀になると、ディアコニアの業を担う器として、ディアコニアは国教会から修道院の仕事へと移っていきました。当時、修道院ばかりではなく、病院や宿屋や孤児院や老人ホームなどもその業の責任を担いました。カール大帝 (*Karl Great*) は、802 年にその戴冠式で次のような言葉を残しています。「隣人を自分と同じように愛しなさい。できるだけ貧しい人に寄付しなさい。また、貧しく弱ってさまよっている人を自分の家に泊めてあげなさい。病人を見舞いなさい。」それからカール大帝は、地方の指導者たちにも、自分の意向に従い、このように人々を助けるようにと通達しています。彼以降、

ディアコニアの責任は、社会的指導者に委ねられていきました。(ローマ 13:1-7, 1. テモテ 2:1-4) そして、カール大帝以降は、ディアコニアの業は、紆余曲折を経ながら、霊的グループとその周辺にいた民衆たちが担っていきました。

この中世期において、ディアコニアの業を表した最も代表的な例としてあげるのは、フランシスコ・アッシジ (*Franciscus Assizi, 1182-1226*) という人物です。彼は世界歴史上、最も憐れみの星として、今もその名は有名です。また、ハンガリア王の姉妹であるエリサベツ王女と聖カタリーナ、そしてスウェーデンのビリキッタなどが中世において、愛の業を行った有名な人物です。中世のディアコニアの紹介は短くなっていますが、次は宗教改革とディアコニアの復活ということについて学びます。



フランシスコ・アッシジ

「平和を求める祈り」

わたしをあなたの平和の道具として

お使いください

憎しみのあるところに愛を

いさかいのあるところにゆるしを

分裂のあるところに一致を

疑惑のあるところに信仰を

誤っているところに真理を

絶望のあるところに希望を

闇に光を

悲しみのあるところに喜びを

もたらずものとしてください

慰められることよりは慰めることを

理解されることよりは理解することを

愛されることよりは愛することを

わたしが求めますように

わたしたちは与えるから受け

ゆるすからゆるされ

自分を捨てて死に

永遠の命をいただくのですから

3. ルーテル教会のディアコニア

今までの歴史のまことから未来へ

使徒たちは、キリストの宣教方法を引き継ぎました。イエス様は、その弟子たちに「わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」と言われました（ヨハネ 13:20）。使徒たちの務めから発生した働きは初代教会から4世紀まで、ディアコニッセたちの働きにおいて、すばらしい発展を見ましたが、中世という暗い時代の約1000年の間に、ディアコニアの務めが低迷しました。

ディアコニアの務めが、カトリック教会に宗教改革のころまでかろうじて残っていましたが、それは司式的ぐらいでした。宗教改革のプロセスの中で、教会は神学へ情熱を注ぐようになりましたが、すぐにはディアコニアの活動になりませんでした。しかし、クリスチャンたちは再び、聖書から来るディアコニアの大切さが分かってきました。

しかし、宗教改革後のプロテスタント教会内には、まだ、ディアコニアをする力はありませんでした。が、次の18-19世紀にディアコニアの復活が見られました。まず、一般のクリスチャンは、日常生活の中で隣人を愛することに徹しました。

19世紀のルーテル派のディアコニアは、主に病院や孤児院を設置し、そのことに集中して行われました。4世紀ごろのディアコニア精神に帰ろうとする運動がありましたが、それは結局実現しませんでした。19世紀以降復活したディアコニッセたちの働きが、次第に教会内で認められるようになったのが、20世紀のディアコニアの姿です。

① マルティン・ルターとディアコニア

宗教改革は、特に神と人間との間に変化を及ぼしました。改革以前のマルティン・ルター (*Martin Luther 1483-1546*) は、とにかく律法的でした。ところが彼はある時、福音に対して偉大な発見をしました。このことが宗教改革のもととなりました。この16世紀の始め頃まで、神の福音と恵みが民衆から隠されていたのです。ルターの「救いは

「信仰のみ、恵みのみ御言葉のみ」という発見は、世界のディアコニアの歴史にも新たな可能性を見出したのです。

信仰と愛の業の関係とその共通点はそれまでのディアコニアに対して新しい土台を与えました。ルターの著書の「キリスト者の自由」によると、「すべてのクリスチャンは、信仰によって富を持つ者となります。そのため彼らは、この偉大な信仰を隣人のために自由に用います」。新約聖書の中のマケドニア教会のクリスチャンのように、「自分自身の愛の業は一生、隣人のために用いる」のでした。彼らの心は常に「隣人に仕えたい」という思いで満ち溢れているなどとⅡコリ 8-9 章、特に 8:1-4 に書き記されています。

ルターは、当時のカトリック教会のあり方を非難しました。なぜなら御言葉は、ただ礼拝の朗読と司式でしか与えられていなかったからです。ルターはそれを大変 悲しみました。彼は初代教会のディアコニアをも復活させたかったのです。あの頃のように、貧しい人々に施し、配餐し、病人を世話し、困窮している人々を訪ね歩くことなど、「キリストの心」を教会内に取り戻したかったのです。しかし、彼は言います。「いくら様々な慈善のアイデアがあっても、まず、神ご自身がクリスチャンを生み出すことの方が大切です。我々もそれを待つべきです。」人はまず正しい信仰に導かれてから愛の業が必ず生まれてきます。これこそルターの信仰と愛の業との関係を表し、ディアコニアの精神の理解であります。

また、ルターがよく用いていた言葉に、次のようなものがあります。「すべてのクリスチャンは隣人に対して、心から互いに、父のようであり、母のようであり、兄弟のように見えます。」このことは、全信徒教会のあるべき姿を表し、また同時にディアコニアの心をよく示しています。教会は全信徒によって「信仰・希望・愛（仕える）」を表し、神と生き生きとした関係を持つのです。また、ルターは当時の社会腐敗に対しても戦いました。物乞いをしている者、怠け者などに対し、「自分の収入、生活のためによく働いてください」と訴えました。単に貧しい人に寄付するだけでなく、その人の生活の根本的な問題をも忘れませんでした。

そしてさらに、特筆すべきことは、ルター派の場合はカトリック教会の修道院システムを設置せず、各クリスチャンが社会の中でディアコニア人として信徒牧会を展開していました。そのためプロテスタント教会は、カトリック教会のような立派な設備を備え

た病院がなく、当時の 30 年戦争での負傷者や疾病患者たちに、行き届いたディアコニアができませんでした。

② 敬虔主義のディアコニア

1546 年ルター没後、ルター派神学は、生きた教えから極端な正統主義へと傾倒していきました。その後、17-18 世紀に向かって、ある人物を通して敬虔主義という運動が生まれてきました。敬虔主義の父と呼ばれているフィリップ・ヤコブ・スペネル (*Philipp Jakob Spener* 1705 年没) は正統主義の有様を「死んだ神学」だと批判しました。彼は「信仰とは愛の業によって現される」と訴えました。また、「全信徒牧者の必要性和、教職者と同様に信徒も聖書の学びに招かれるべきであること」を主張しました。

敬虔主義の流れをくむ指導者たちは、「すべてのクリスチャンは、隣人のために仕えることができます」と主張しました。彼らは貧しい人々に対して寄付することよりも、職場探し、および職場を提供するように努めました。そこでは寡婦、孤児、身障者に対して、立場や肩書きや宗教に関係なく、その人の人間性に対して尊厳を持った手当てがなされるべきだと強く主張しました。

スペネルを初めとする敬虔主義の指導者たちによって、多くの公共施設（病院・孤児院など）ができました。また、貧しい人のための募る事務局も生まれました。この運動の結果として、当時の社会的貧しさの中に置かれた人や病人、差別や虐待されていた何千人もの人々を助け、世話することができました。

スペネルの友であり、彼の同志・弟子でもあるオーガスト・ヘルマン・フランケ (*August Herman Francke* 1727 年没) は当時、ハレ大学の教授でしたが、ヨーロッパで初めての近代的な孤児院を建てました。この孤児院建設の際、彼は誰にもどこにも助けを求めず、「神のお約束に信頼して、すべての祈りに神は答えてくださる」という信仰によって完成させたそうです。政府からの援助など一切受けず、ただ神への信仰に頼りました。

フランケの祈りは、特に社会から見捨てられた幼子や若者に向けられ、その人々への教育へ力が注がれました。偉大なカリスマ性を持ったフランケは、ドイツの福音的

ディアコニアに大きく教を残しています。今日のわたしたちもフランケを通してそれを知ることができます。彼によって、ディアコニア主義というものが 社会にはっきりと提示されました。また彼は、公共施設のモデルを提供しました。フランケの信仰は、伝道の視点と社会的・教育的な視点との二つが巧みに重なり合って展開していきました。

もう一人の敬虔主義の人物を紹介します。フランケの弟子であり、ハレ大学で働いていたニコラウス・ルードヴク・ヴァン・ズィンゼンドルフ (*Nikolaus Ludvig Zinzendorff* 1760 年没) は、ドイツで初めての自由教会を創立しました。その教会は、牧師と共に信徒牧会者が互いの賜物や才能や使命によって、いっしょに働きました。彼もまたカリスマ性に優れ、どの地に出向いても交わりから離れていたクリスチャンを集めました。

ズィンゼンドルフは「救い主の村」を国のあちこちに作りました。そこは、キリストの救いによる喜びによって、一人一人が喜び輝き、互いに心を合わせた霊の村でした。この村の中では困った仲間を助け、彼らの間では何の差別も軽蔑もありませんでした。もちろん孤独な者へも手が差し伸べられました。その内容ですが、教会の働きには何の規制もありませんでした。それぞれが自由に規制していたのです。また当初は、ディアコニアのための専門職はなく、すべての人がディアコニアしていました。しかし、1745 年以後、「霊の村」の働き人として、教会から按手によってディアコノスとディアコニッセが派遣されました。

③ ヨーロッパ、ドイツのディアコニア

19 世紀のディアコニアの中から女性たちの例も出てきます。そのうちの一人はアマリエ・シェベキング (*Amalie Zieveking*) でした。彼女は 1820 年代に、一人のクリスチャンの政治家から「貧しい人々や病人のためにあわれみの家を作るように」との勧めを受け、小さな施設を建てました。当時、アマリエと同じような「ディアコニッセ」たちが現われてきて、さまざま提案をし、社会や政府に働きかけました。そうした働きで、多くの疾病患者や貧者が助けられ、収容されたりしました。

また、もう一人の女性は、イギリス人のエリザベツ・フライ (*Elizabeth Fry* 1845 年没) です。彼女は「牢獄の天使」と慕われました。彼女の働きから、多くの女性たちは入獄者に対して、ディアコニアをまねていきました。

ところでディアコニアの歴史にとって、1833年（秋）はとても大切な年です。それはなぜかという、二つの偉大な働きがささやかな個人的ディアコニアから始まり、そしてそれが大きく展開していったからです。

それでは二人のドイツ人の牧師を紹介しましょう。ヨハン・ヒンリッチ・ワイセル (*Johann Hinrich Wisern 1881年没*) とテオドール・フリードネル (*Theodor Fliedner 1864年没*) です。ワイセルは、フランケとズィンゼンドルフからの影響を受け、ハンブルグという町で日曜学校の教師をしていました。彼は子供たちが社会から見捨てられて弱い立場におかれているのを見て、その男の子たちのための世話をし始めました。(1833年9月9日のことです。) この働きは後になって、ディアコノス養成の学校となりました。ワイセルはその上、囚人、貧者たちをも助けました。

それからワイセルの人生にとって、1848年に、決定的な出来事が起こりました。それはウィッテンベルグ(Wittenberg)教会の総会でのことです。彼はその席上で、教会内のディアコニア、あるいは国内伝道についてこう提言しました。「我々は今、ヨーロッパの本性を見ました。わたしは思います。今こそすべてのクリスチャンの手は、愛の業のために捧げ、伸ばさなければなりません。すべてのクリスチャンは、神のディアコノスとしての責任を賜っています。」そして、ワイセルの言葉を聞いた人々は賛成し、手を挙げて約束しました。「神がわたしたちをどこに遣わそうとも、わたしたちは喜んで遣わされます。」この出来事によって、ワイセルは国内伝道とディアコニアの偉大なリーダーとされました。彼はディアコニアについて、偉大な功績を残しました。

ワイセルは、教会がなすべきディアコニアの方法と、各施設でされるディアコニアの架け橋を作り、その間の適切なバランスを作り上げました。教会史の中で、消えたかと思えた初代教会のディアコニア精神と組織を、彼は復活させたかったのです。彼によって、悩んでいる多くの人が大切にされなければならないことが再確認されました。また彼は、各地方教会に十分教育されたディアコノスを設置することの必要性と、その人々を総括すべきリーダーの必要性を提唱しました。しかしその時代は、彼の考えを受け止めるにはまだ時期が早かったようです。彼の考えは実現にまでは至りませんでした。彼によって信徒牧会者中心の国内伝道とディアコニアの道が備えられたことは、大きなスタートでした。

もう一人のテオドール・フリードネル (*Theodor Fliedner*) は、女性のディアコニア教育のための土台作りをしました。フリードネルは牢獄から解放された一人の女性を牧

師館の庭に收容し、そしてこのことを通して女性の立場を理解し、具体的に援助するようになりました。フリードネルは、イギリスのエリザベツ・フライを訪問してから、女性のためのディアコニッセ育成施設を作りました。それは不思議に、ワイセルがディアコノス学校を開いたのとほぼ同時期でしたが、彼らはまだ、お互いを知りませんでした。フリードネルのディアコノス学校は 1833 年 9 月 17 日に創立されました。

フリードネル自身の家庭は、祖父、父と代々ルーテル派の牧師を務めました。彼はハレ大学で神学を学び、フランケに影響を受けました。彼は 21 歳の時に 150 人の教会の牧師になりましたが、その教会は貧しく、生活がなかなかできませんでした。その理由で、彼は募金活動をするため、14 ヶ月にわたってヨーロッパを旅することになりました。フリードネルは、ドイツ以外の国々のディアコニアを見て感動しました（例えば、オランダの愛の業、そしてイギリスのエリザベツの働き）。彼が長い旅を終えて帰国したのは 1826 年でした。それから数年後、フリードネルはドイツで初めての囚人を助ける社会作りを始めました。（特に女性の囚人とその子供、刑期終了後の人々に対して。）そしていよいよ前に紹介したように、1833 年に、刑期を終えて社会に出る一人の婦人を收容し、また幼子のための学校を作りました。それからフリードネルは、1836 年に一軒の家をローンで購入しました。これが後になって「ムッテル・ハウス」（母の家）と呼ばれました。

フリードネルの働きは非常な困難の中をとおられました。見事な成長を遂げました。それは三つの実としてまとめることができます。まず一つは、教会のためのディアコニアの働きの具体化です。二つ目は、幼子や孤児の世話とその教育者の養成です。加えて囚人のお世話です。また彼は、カイセルベルゲ (*Kaiserwert*) で初めての近代的な看護学校をも作りました。そして、かの有名なフローレンス・ナイチンゲール (*Florence Nightingale*) もこの学校で学んでいます。

この働きは 100 年の間で世界中に広められ、1936 年の 1—周年記念集会では、100 箇所施設から 225 名のリーダーが集められました。そして驚くべきことに、彼らのもとに、実に 36 000 名のディアコニッセたちが誕生していたのです。4 紀の世紀ディアコニッセたちが帰ってきたようでしたが、フリードネルの時代以後、各教会は彼女たちを迎えるのに 100 年の時を待たなければなりませんでした。

④ 北欧に渡るディアコニア

ドイツのムッテル・ハウス運動 (*Mutter House*) が、スカンジナビア半島に伝えられました。そこでの指導は、ドイツのカイゼルベルト (*Kaiserwert*) のディアコニッセが担いました。スカンジナビア半島で初めてのムッテル・ハウスが誕生したのは、1851年、スウェーデンのストックホルムでの事でした。この施設のおもだった働きは三つあります。一つは病人のための具体的な働きでした。二つ目は看護婦学校を作ったこと、三つ目としてスウェーデン人の福祉リーダーを起こすための学校を作ったことです。そのみならず、後には、孤児や弱者のための収容施設や、女性のためのマグダレーナの家も創設しました (マグダラのマリヤ)。現在、ムッテル・ハウスは、スウェーデンにある5つのディアコニア施設の中で、最も多岐にわたるディアコニアの働きを展開しています。

次はデンマーク (*Denmark*) のディアコニアです。1863年、デンマークで初めてのムッテル・ハウスが誕生しました。始まった背景として、当時のデンマークのロビセ (*Lovise*) がデンマークを訪問した際、ぜひ自分の国で具体的指導をしてほしいと要請したことがあります。この国でも、まず始められたのは、病人看護からであり、そして2年後には子供や貧者、寝たきりの人々への訪問が始まりました。スカンジナビア全体は飢饉が多く、人々は大変ひどい状況に置かれていたようです。現在は2つのディアコニッセ学校と2つのディアコノス学校の計4つのディアコニア養成学校があります。

そしてノルウェー (*Norway*) です。ノルウェー最初のムッテル・ハウスの誕生は、1866年のことでした。この国でのディアコニアもまず病人や貧者の世話から始められました。現在はオスロのロビセベルク (*Loviseberg*) を筆頭に2つのディアコニッセ大学とディアコノス学校が1つ、計4つのディアコニア養成学校があります。

さて、フィンランド (*Finland*) の場合は、先ほど紹介した他のスカンジナビアの国々とは少し異なります。フィンランドのディアコニアは、もちろんドイツからの影響も受けましたが、特に福音的ホスピタルは、当時のロシア帝国のキリスト教会中心地であったペテルスブルク (*Petersburg*) からの影響が大きかったようです。フィンランドで最初にムッテル・ハウスが誕生したのは1867年、首都ヘルシンキ (*Helsinki*) において、それに続いて現在はロシアにあるウィーボルグ (*Wiborg*) にできました。これらが誕生した背景は、深刻な長期にわたる飢饉でした。ひどい悪天候が続いたため、穀物等の収穫の道が閉ざされ、病人や孤児の世話が国策優先順位の第一位となっていたのです。1894

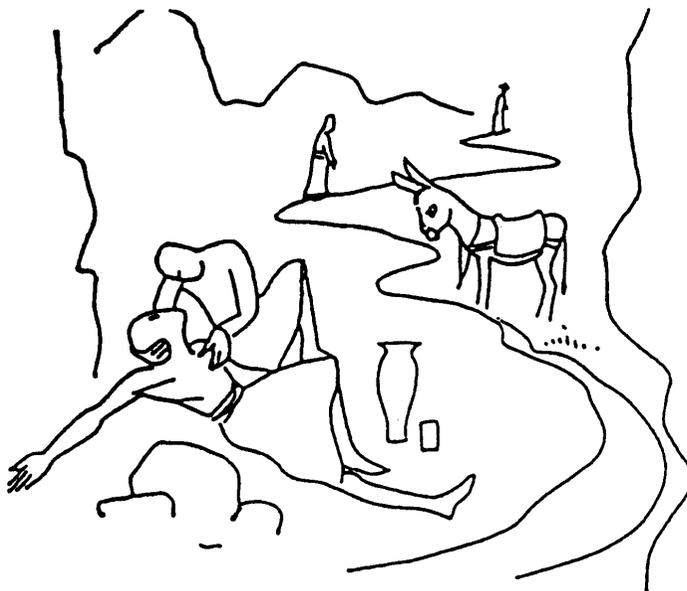
年には、現在ロシアにあるソルタワラ (*Sortavala*) に、スカンジナビアにおける初めての別の施設が誕生しました。それまでは看護婦養成にとどまっていたこれらの働きでしたが、このディアコニッセ養成学校の場合は「各キリスト教会の中で働くことができる奉仕者」育成を目指したのです。これは画期的なことでした。その後、同じ目的を持つもう一つのディアコニッセ養成学校が1896年、オウル (*Oulu*) の町にできました。

フィンランドのディアコニア史に大きな変化が起こったのは、第2次世界大戦の時でした。対戦後、フィンランドの土地の東部の一部がロシアのものとなりました。ウーボルグやソルタワラは略奪され、その働きが継続できなくなりました。フィンランドのディアコニア史は新たにスタートしました。それまでにあった4つのディアコニッセ学校に加え、もう一つのディアコニッセ学校が1949年、ポリ (*Pori*) に誕生しました。またディアコニス学校が2つでき、現在、それぞれが大学システムに変わり、ティンランには現在1,000人以上の卒業生がいます。

最後にエストニアのディアコニア史を紹介します。フィンランドは1917年にロシアから独立しましたが、エストニア (*Estonia*, バルティア三国の一つ) は第二次世界大戦後、併合されてしまいました。エストニアでも、1867年にドイツからのムッテル・ハウス運動により、ディアコニッセ学校が創られました。しかしそれも、ロシア時代になくなりました。最近(90年代)、エストニアのためのディアコニアが急務だと考える人々によって、この資料ができました。

時代はもとに戻りますが、エストニアでのディアコニアは、貧しい女性のための病院や孤児院建設から始められました。ドイツから3人のディアコニッセが来ました。彼女たちは学校を用意し、人々にディアコニアの働きや宗教、具体的看護を教えました。彼女たちはディアコニアの復活を願っていました。10年間働きつづけ、帰国後はエストニア人がその働きを担いました。首都タリナの市役所では、この小さな病院に関心を示し、寄付を呼びかけて、経済的援助をしました。その働きが成長発展し、男性も収容できるようになりました。その病院は難しい手術をも手がけ、大変評判が高くなりました。特に眼病の治療は有名でした。ディアコニッセ希望者には、いくつかの条件が求められました。まず年齢は18-40歳。そして未婚者が寡婦であること。編物などの女性的な賜物を持ち、さらには力仕事に適した女性であること。1012年まではドイツ人以外は入学できませんでしたが、この年からはエストニア人も入学できるようになったのです。エストニアのディアコニア学校は世界で41カ所目でした。

現在の、90年代に復活されたばかりのエストニアのディアコニア（50年ほどロシア時代の中で全く禁じられていた）は、再びディアコニッセとディアコノスたちを育て始めているところです。



⑤ フィンランドルーテル教会のディアコニア紹介

20世紀のフィンランドルーテル教会で、教会内のディアコニアが生まれました。後で紹介する一人の人物は、ディアコニアが教会の歩みの中でどんなに必要であるかということを学びや経験によって示されてきました。やがて、ディアコニアのことはフィンランドルーテル教会の憲法に条文化され、各地方教会に初めてディアコニア人を派遣することになりました。そればかりではなく、全ての教会員がディアコニアをする責任者であることが認められ、そのことを通して、今日のような教会内のディアコニアの形ができていきました。

ディアコニアの父と言う人物の紹介

フィンランドの教会が「ディアコニアの父」と呼んでいるオット・アールニサロ（*Otto Aarnisalo* 1942年没）という人の働きによって、少しずつディアコニアが浸透していきました。

アールニサロは大学生のときに、首都ヘルシンキにおいて、国内宣教の奉仕(日曜学校の先生、男子の孤児院のリーダー)をしました。彼は神学を学びながら、奉仕の経験を重ねました。彼はこの経験によって、子供たちの実情を知り、自分自身の将来を牧師として生きようと決心するのです。彼の残した有名な言葉をご紹介します。「ディアコニアとは、一番難しい状況のところから始めなければなりません。」(これは現在のフィンランドルーテル教会憲法に残っている文章です。)

アールニサロは神学校卒業後、ミッションスクール教師や獄中伝道、それに加え、教会では牧師としても働きました。しかしこれは、彼の働きのほんの一部です。彼は牧会中に、その経験を通して、ディアコニアの倫理的研究をしています。彼は年「ディアコニア、つまり教会ができる困窮者への世話」という論文を発表し、その2年後、100ページに及ぶ本を出版しました。その題は「フィンランド教会のディアコニアとは何か」というものでした。この本は現代のディアコニアのための道備えの役目を果たしました。

この著書は、現在でも広く適用されており、その内容は、教会組織やその目標、また活動についてディアコニアのために働きました。その著書の中に「わたしたちフィンランドの教会にとって、教会憲法においてディアコニアについての規則が制定されていないなら、わたしたちには、ディアコニアは存在しません」と述べており、彼はすでにある教会組織を整理するとともに、1913年、ディアコニアについてのすべての項目を教会憲法に取り入れるように奔走しました。しかし、実際に彼の提案が取り入れられるのは約30年後でした。そしてアールニサロ自身はその2年後に天に召されました。

⑥ フィンランドルーテル教会憲法によるディアコニア

それでは1944年4月24日に発表されたフィンランドルーテル教会憲法のディアコニアの部分をご紹介します。

- ① 「各教会、すなわち全ての教会メンバーは、ディアコニアを担うべき責任があります。
- ② ディアコニアの働きの目的は、キリストの愛から出てくる霊的・肉体的・経済的(物質的)援助を、困窮者に捧げることです。

③ 助けが最も急がれる人々に対して、してはいけないことは、的外れの援助です。」

この第3項がきっかけとなり、ディアコニアの意識と研究が進展していきました。

以前のディアコニアとは、前に学びましたように、グループ単位で担われました(病院や孤児院、学校、獄中伝道)。ところがアールニサロの考えるディアコニアの務めとは、「牧師先生の働きの手伝い」(よりディアコニアの手が困窮者に届けられるように)でした。

1944年の教会憲法には、「全ての各地方教会には、一人のディアコノスかディアコニッセを派遣しなければならない」と提示され、その約20年後の1964年の教会憲法ではさらに、「そして彼らは、各地方の教会監督から按手をもって任命されるものである」という文章が付け加えられています。初期には一人の働き人が多くの援助者を抱えていましたが、現在は各領域に専門的な人々が配置され、上手に分業化されています。

教会のディアコニアは社会の変化とともに成長してきました。ディアコニアの成長の秘訣は、社会の変化を凝視しながら、その必要に応じてきたことです。そして現代のようなディアコニアの形になりました。このように教会は、いつも人々に目を向けました。人々の援助へと出かけ、それが形となってくるとそれを社会に委ね、また新たな困窮者の発見のために、そしてディアコニアのために出かけて行くのです。教会とディアコニアとは、社会と一緒に生きてきたのです。

⑦ フィンランド教会のディアコニア人の教育について

フィンランドルーテル教会のディアコニッセたちの教育は、ムッテル・ハウスのシステムに従って看護婦の資格を持つようになっていきます。ムッテル・ハウス時代に、ディアコニッセたちは病院などで働くことができましたが、それは自分たちのホームを通しての働きでした。彼女たちはホームから生活費だけをもらい、一生ムッテル・ハウスに結びついていました。しかし、1950年代ごろに、ディアコニッセたちは普通の社会人として働くようになりました。その一つの大きなきっかけは、フィンランドルーテル教会の憲法によるディアコニッセたちが各地方教会に派遣されることになったことで

す。そして、他のディアコニッセたちも、自分がどこで働きたいか、自由に求めることができ、直接に各病院やケアハウスなどで社会人として働くようになりました。

各地方教会のために新しく派遣されたディアコニッセたちの働く場所は、自然に、人々の家になりました。看護婦の資格を持っていたディアコニッセたちの各家でのケアする働きは、深く信頼され、社会的にも大きく役立ちました。それはちょうど、第二次世界大戦から 1960 年代の終わりまでの時代でしたが、教会内のディアコニアはその内容（形）において、1972 年にできた全民（国内）保険システムによって大きく変わりました。教会からのディアコニッセたちの看護すること全体が国の責任になったので、教会のディアコニアは新しい道に向かい始めました。しかし、ディアコニッセたちの看護婦としての教育は 1980 年代に変わり、同時にディアコノスとディアコニッセを、社会に向かつての育てる教育システムは出来上がりました。そう言う訳で、女性も男性もディアコニア人として、各地方教会ばかりでなく、社会の中でも働ける可能性が沢山与えられました。フィンランドルーテル教会のディアコニアのためにディアコノスを教育するシステムはディアコニッセの教育と同じように 4 年間の学ぶコースになっています。

フィンランドでは、70 年代から、以前よりずっと豊かな生活の中で、新しい種類の問題が起こり、特にカウンセラーの要求が出てきました。そういうわけで、看護婦にならずに福祉やカウンセラーの学びを含めて、男性にもディアコニアをするチャンスを与えるディアコノス養成の教育もあります。現代では、フィンランドルーテル教会の約 600 の地方教会で、1200 人ほどのディアコニッセとディアコノスが働いています。（人口 500 万人のうち 80% 以上はルーテル派の教会員で、3000-4000 人の教会員につき 1 人のディアコニッセかディアコノスが置かれています。）

フィンランドルーテル教会のディアコノスとディアコニッセたちは、規定のディアコニア教育を修了したディアコニア専門の人々のことであります。また、彼らはディアコニアを具体的に実行する人々であり、さらにはディアコニア人の養成とディアコニア活動の将来的計画に着手する人々であります。信徒にふさわしいディアコニア養育をし、グループを作り、そこでそれぞれのディアコニアを展開していく責任があります。また彼らは守秘義務を負う者であります。そして彼らは、ディアコニア養成教育によって、細則どおり、各地方教会で約束された働きに対する責任を持ちます。これらの細則は、ディアコノスやディアコニッセたちが、自由に愛の業をささげられるように、さまざまな可能性に対処できるようにと設けられたものであります。

Ⅲ. 教会としてのディアコニア

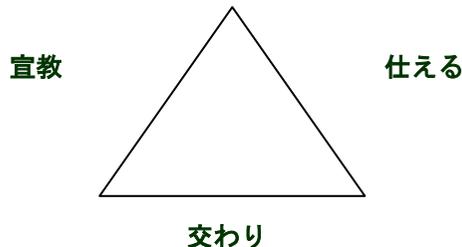
イエス・キリストはその弟子たちを呼び集め、イエスの名によって福音を伝えたり、悪霊を追い出したり、病人をいやすために彼らを遣わされました（マルコ 3:14-15、ルカ 9:1-2）。キリスト教会の働きは、イエス様の宣教に従って、福音を伝えると共に愛の業を現す生き方です。使徒時代の教会で「弟子の数が非常にふえていった」ので、教会の務めはみ言葉を伝える人と「食事の世話をする」奉仕者とに分けられました（使徒 6:1-7）。このやり方は当時の教会にとって大変必要に見えますが、それはまだディアコニアの始まりではありませんでした。しかし後の教会は、このやり方を通して、ディアコニアとは何であるか大きく学ぶことができました。

1. 教会の主なディアコニアとは

ディアコニアとは、キリストと共に現われ、存在し、未来に来るあろう神の国の栄光です。生きておられる主キリストは、教会である身体を通して、私たち人間のために働いてくださいます。

イエス様の生涯は、キリスト教会の本来の姿です。クリスチャンは、主キリストに現れた救いについての和解の言葉を証すると共に、あらゆる困難の中に歩んでいる人々を助け合います。この務めのために、教会では職務（執事）が必要です。

教会の務めは、この三角の形であらわされるように三つに分けられ、それは福音を宣伝えること、交わりをすること、仕えることとなります。



これらを一つの言葉で言うと、教会全体の働きは、「仕えること」です。それはなぜかというと、教会はすべての人々のために備えられた（伝えられた）僕の集まりですから、その働きはこの地上に生きている期間と永遠にいたる救いをえるために必要です。

福音を宣伝えることは、キリストの救いに基づくことと同時に、将来の救いを示しています。交わりをすることは、各教会の中での一致です。それと同時に、一つのキリストにある群れは、いつも全世界にある教会の一部です。それは過去の歴史において、また現代において、また来るべき世においての交わりです。

教会の務めは、人々を一つにすることです。教会の頭であるイエス・キリストは、教会員の一人一人を、よい実を結ぶように導いてくださいます。

2. 本来のディアコニアの働き

洗礼を通して、すべてのクリスチャンは、神の国の信徒牧会者としての資格が与えられます。それは教会員としての責任であり、神の国が前進し、拡大するためのすばらしい特権です。務める重要な内容は、それぞれの時代によって多少異なりますが、絶対に変わらないのは、御言葉と聖礼典に基づいてなされるということです。

ルーテル派によると教会の務めは一つだと言います。それは仕えることなのです。「キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい」と言うローマ 15：6-7 に書いてある御言葉は、仕えることをよく表しています。「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい」（Iペトロ 4:10）。

教会の務めとは、キリストの務めにに基づきます。キリストは、

- ① 神の御心を宣伝える預言者でした。ですから教会は、キリストにある救いを宣伝えることを通してキリストが教会の群れの中に存在し、働かれています。
- ② また王であるキリストは、人々に対して仕えてくださいました（マタイ 20:28）。クリスチャンは仕えることを通して、信仰を見える形であらわしています。

す。

③ 大祭司であるキリストはよい牧者であり、神と人々との間のつながりを回復させました。教会（クリスチャン）は救いに預かった人々と交わることによって、キリストとの生きた交わりをあらわしています。つまり、すべてのクリスチャンは、教会の中でキリストの務めに預かっているのです。けれども一方、教会の働きは、特別に按手を受けた人々によっても担われます（使徒 6:2-6, 13:2）。

アウグスブルク (*Confessio Augustana*) 信仰告白の 13 の 11、12 節に次のように書かれています。「神の使命は、伝道者とディアコノスを任命することです。なぜならば、神は選ばれた人を通して福音が伝達されることを望んでおられるからです。また一方では、教会によって選ばれた人々を通して、福音が伝達されることを望んでおられます。」

ディアコニアの務めは、神が与えられた教会の務めであり、その 3 本の柱（宣教・仕える・交わり）は信徒同志互いに仕えることですから、ディアコニアそのものです。



3. ディアコニアという言葉とは

ギリシャ語の「ディアコネオー」(DIAKONEO)という言葉にはいくつかの意味があります。例えば、「奴隷として仕えること」、「務めること」(教会での執事)、または「礼拝の司式等の奉仕」などです。

ディアコニアは、日常的に、他の人にとって必要なときに、全人格的に愛の業をすることです。それは一般的に言われる隣人に対する愛情ではなく、具体的な行為です。私たちは、本当の仕えることの意味や態度をイエス様から学ぶことが必要です。(フィリピ 2 : 3-8)

新約聖書から出てくる「ディアコネオー」という動詞は、仕える、奉仕する、世話をする、もてなす、礼拝の中での司式など執事の仕事を務めるときに使われています。

ディアコニアという名詞は、奉仕、務め、働き、執事としての仕事のときに使われています。ディアコニアをする人はディアコノス (DIAKONOS・男) / ディアコニッセ (DIAKONESS・女) と言います。または、召使、奉仕者、僕、執事などの時に使っています。

初代教会では、愛の行為すべては、ディアコニアを意味していました

- 自分を顧みないで、従順に僕のように使えること (マルコ 9 : 35、マタイ 25 : 34-36)
- 与えられた賜物をもって仕えること (I コリント 12 : 4-31)
- 福音を宣伝することと、愛の行為をもって仕えること (使徒 6 : 4、I ペトロ 4 : 7-11)
- 捧げ物を通して仕えること (ローマ 15 : 25、30、II コリント 8 : 1-9) と与えられた仕事を通して仕えること (使徒 1 : 17、25、20 : 24)
- 教会に於いて、仕え人として奉仕すること (コロサイ 4 : 17、ローマ 12 : 7-8)

また、ディアコニアという言葉は、「DIA」という前置詞に「EGONEO」が結びついたもので、その元の意味は「急ぐ」ことを現しています。ですから私たちは、イエス様について「早く」そして喜んでいそいそと仕えるのです。

4. 教会とは何ですか

教会とは、イエス・キリストを信じている人々の交わりです。洗礼によって教会に集められてくるクリスチャンは、いつも「我は聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わりを信じる」と告白します（使徒信条）。教会は信仰と希望と愛による生命体をあらわしています。（Iコリント13:13）。

聖書は教会について、「キリストを着ること」と「キリストの体であること」を次のように例えています。「洗礼を受けて、キリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。あなたがたは皆、キリストにあって一つだからです」（ガラテヤ3:27-28）。また、「あなたがたは、キリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（Iコリ12:27）。

教会は、いつも天国に向かって「旅する神の民」です。その旅路は、旧約聖書時代のイスラエル人の歩みと似ています。Iコリ10章に書いてあるように、イスラエル人の荒野での40年間の旅は、わたしたちクリスチャンにとって「警告するためなのです」（11節）。旅行中には、様々な事が起こりますが、共にいらっしゃる神様は、いつもその民を守り導いてくださいます。そして旅の中で起こる変化に対して、いつでも移動可能な心準備をしているためにも働いてくださいます。

教会は互いに愛し合う家族のようなものであり、日用の糧や友人をいただく所なのです。そうした教会は、子供や若者の疑問に答えが与えられる所です。大人の場合、親密で互いに尊敬し合う人々に出会い生活する場所です。

また、教会は、希望を失った人々に対しても答えを与えられるところなのです。アウグスティヌス（Augustinus, 354-430）の文書によりますと、教会とは大きな病院のようです。わたしたち皆に「罪ある病氣」があるからです。それが完全にいやされるの

はこの旅路の終わりである天国です。しかし、教会のメンバーが元気であれば外向きへの伝道へと向かいますが、元気がないと信徒同志互いの助け合いをします。

また、教会は、「わたしは誰か」という問いに対して、「わたしは神の子供です」と答え、そしてわたしたち一人一人に新しいアイデンティティを与える所です。ですから教会は、「わたしは神によって創られました。そしてわたしが生まれる前から、使命をお与えになりました。それぞれかけがえのない人として、まるで家族のように、皆が世話をし合っているのです。それからイエス・キリストによって救われているわたしたち一人一人の名は『命の書』に書き記されています」と答える人々の群れです。

教会生活の根本的行為は、2、3人のクリスチャンの集まりの中によく表わされています。互いに助け合う姿こそ、本来の教会の姿でしょう。いろいろな人間的な弱さがあっても神に希望を持って、なお前進するのです。（この文章は、「フィンランドの教会2000年に向けて」という文章からの抜粋です。マタイ18:20）

5. ディアコニア活動についての細則

各地方教会は、自分のディアコニア活動のために、① すべき援助の必要について詳しく調べる、② それらに対する方法と可能性について調べる必要があります。③ 具体的なディアコニアの結果について反省と検討をすることと、④ 役員会を設定し、ディアコニアの働きのための提案を設ける必要があります。また、⑤ 各地方教会にとってディアコニアについての将来的プランを立てる必要もあります。

各地方教会の責任者は、様々な形でディアコニアを養成すべきです。例えば、訪問する時に、被援助者とディアコノスとの関わりがスムーズに機能しているかという点に責任を有します。また、援助者側の視点と被援助者の必要性のズレに敏感であるように。さらに、他教会のディアコニアシステムに託すことも可能です。

教会のディアコニアの務めは、単に具体的に働く奉仕人を起こすだけではなく、ディアコニアについて責任を負い、各信徒に指導できる人々を育成することが重要であり

ます。各地方教会には、次の世代が「ディアコニアとは何か」を知るために、ディアコニア教育の責任があります。

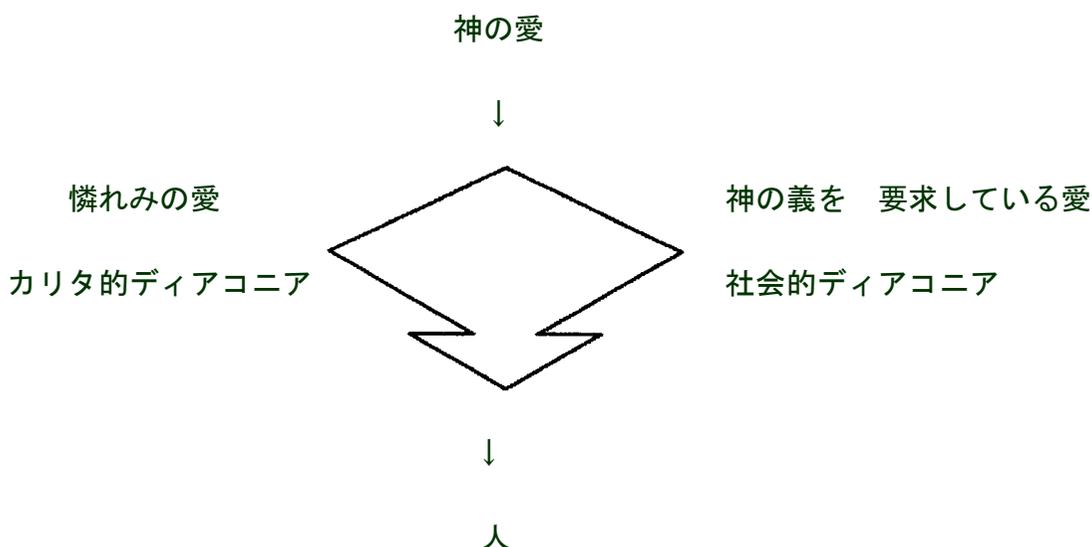
また、教会のディアコニアは、単独で働くというよりも、社会的援助システムと協力して働きます。例えば、看護システムが徹底して完備されている地域の場合、教会のディアコニアは別の分野において働くということです。ディアコニアの働きは、いつも社会的な要求にも関係があるからです。

各地方教会は各クリスチャンに対して、国内はもとより、国際的責任と視野が生まれるために、国外にも広く働きかけなければなりません。全世界に及ぶキリスト教会との互いの協力は、ディアコニア活動に富んでいます。



IV. ディアコニアの目標とその特徴について

1. 4つのディアコニアについて



社会的ディアコニアとは何であるか、そして今までのディアコニア資料とどのように異なっているかという点について考えましょう。上の絵によりますと、神の愛から出てくるディアコニアを2種類に分けることができます。その一つは、神の憐れみの愛を表している、個人的な行為を通してのディアコニアであります。もう一つは、神の義を要求している愛を表している、社会の中で出てくるディアコニアです。この両手が同じ目標を持って人々への福祉のために働いていますが、それぞれには違った特徴があり、また片方だけでは十分できない点もあります。

例えば、個人的に—あるいは教会から—差し伸べられる愛によって、困窮している人々を助けることができますが、その不備のために働く力が足りません。神の義を願っている愛は、社会の法律の中に導入されねばならないのです。それは社会が非常に困難な状況におかれ、個人的な憐れみが届けられないような場合が生じるときに、国が動かねばならないからです。そうであっても、個人的ディアコニアは自由に働きつづけますが、国がそれに全面依存することはいけません。個人的ディアコニアはある意味で「国の責任を助ける」ために、国が責任を逃れてしまうからです。

教会のディアコニアは社会の変化とともに成長してきました。ディアコニアの成長の秘訣は、社会の変化を凝視しながら、その必要に応じてきたことです。そして現代のようなディアコニアの形になりました。このように教会は、いつも人々に目を向けました。人々の援助へと出かけ、それが形となってくるとそれを社会に委ね、また新たな困窮者の発見のために、そしてディアコニアのために出かけて行くのです。教会とディアコニアとは、社会と一緒に生きてきたのです。

2. カリタ的ディアコニア

個人的にあらわされている憐れみの愛はカリタ的ディアコニアと言います。イエス様が地上でなさった善い業こそカリタ的ディアコニアでした。聖書の模範に従って、全ての時代の人々はこのようにディアコニアを理解してきました。病人や貧しい人、孤児たちを助けることなどは、現在もディアコニアの内容ですが、その他の助ける方法もたくさんあります。また、人々は教会からのディアコニアの手を待ち、カリタ的ディアコニアのために愛の賜物やお世話のできる賜物が求められました。

カリタ的ディアコニアの目的は、一人の人、あるいは困窮しているグループに会うことです。そしてすぐに援助をすることがこのディアコニアの特徴です。カリタ的ディアコニアは、行為のはじめに、「わたしは何をすべきですか」と尋ねます。尋ねられた人にとって、それは、神様ご自身が、あるクリスチャンを通して働かせてくださる出来事です。が、その質問は後になる場合もあります。

しかし、カリタ的ディアコニアにも欠点があります。例えばアルコール依存症の方を目の前にしたとき、その方がどうしてこのようになってしまわれたのか、その根本的原因を探り、治療していくという、いわゆる根本的処置ができないことです。つまり、十分な援助という点において、まだ不完全なのです。



3. 社会的ディアコニア

旧約時代の預言者たちは、神の義のためによく戦いました。彼らは、一人一人が正しく取り扱われるために、金持ちと貧しい人の間にたって戦ったのです。それは同時に神のみ言葉による霊的な戦いでした。(アモス 4:10-15)

わたしたちは、ディアコニアの歴史を通していろいろな時代を学んできました。それぞれの時代において、良い点も悪い点も出てきましたが、ディアコニアは現代でも大変必要であります。しかし、今日の教会内と社会的ディアコニアはバラバラに働いています。ですから、よりよいつながりができるために絶えず祈るべきです。

社会的ディアコニアの目的は、「人間を守り助けること」です。けれどもそれは、カリタ的ディアコニアのように、一人の人に直接的に会うためではありません。社会的ディアコニアはその規則、組織、法律によって人間を助けることです。これはいつも、社会の諸問題の根本的原因に取り組みます。ですからいつも新しい法律を設けていきます。その困った状況だけにとどまらず、社会的問題にまで掘り下げ、将来的な視点から援助を始めます。

社会的ディアコニアは、将来起こりうる危機的状況を提示し(例えば老齢化問題)、社会あるいは国が援助者を養育していくことなどの、新たなシステム法律の作成のために働きます。そして、わたしたちクリスチャンは、この責任を担う人々の良心が健全に、また十分働くことができるように願います。

社会的ディアコニアは、社会的権威を持つ人々と共に働き、より良い病院や人々が安心して暮らせる法律ができるよう戦い、悪法に対しては、毅然と間違いを非難していきます。

マルティン・ルーサー・キングは、(*Martin Luther King, 1929-1968*) 1967年に「教会と社会主義」の中で次のような言葉を残しています。「教会は覚えていなくてはならない。教会はこのことを示していなくてはならない。教会は国の主人ではない。また教会は国の僕でもない。教会は国の良心である。だから教会は、国を正しく教え導く(非難・指摘を含む)。教会は決して社会の道具ではなく、聖なるみ言葉を持つ預言者の役割を担うものである。教会はクラブのようであってはならない。なぜなら、道徳的権威

を失う からである。もし教会が平和を固持し、経済的問題や人々からもれる不平に耳を傾けず、戦うことを放棄したなら、教会は何百万人の信用を失うだろう。」

教会とディアコニアは、不正と不義に対して戦うべきです。そして絶えず義を求めなければなりません。この社会的ディアコニアは、カリタ的ディアコニアと違って、一人のひとと社会的援助のつながりを特徴としています。また社会的ディアコニアは、時には困難な状況の中を通らされます。いくら働いても、反対されたり、非難されたりします。義のために戦うのは、単に勇気や道徳的だけではなく、ディアコニアの心の正しさを理解し、神の言葉にとどまり続ける勇気が求められます。

4. 福音的ディアコニア

福音的ディアコニアとは、もちろんカリタ的と社会的ディアコニアの中にありますが、それを別々にも考える方がよいです。ディアコニアとはイエス様を信じる信仰の証し、表明ですのでそれは福音によって表れてきます。福音を宣仕えることの目的は、教会を建てることですが、ディアコニアの目的は、困った人々を助けるだけです。ディアコニアは無条件であり、そこまでしか助けられないとか、この場合のみ助けるというようなことでもありません。場合によって、言葉無し¹のディアコニアも、キリストが存在しておられることを証ししていますが、それは、御言葉は使ってはならないという意味ではありません。

ウィッセル・フーフト (*W. A. Wissert Hooft*) という方が「従順な生き方への招き」という本の中で、仕えるということについて次のように書いています。「わたしたちは、魂を勝ち取るために仕えているのではありません。わたしたちは、偉大なお方の僕なのでそのお方にお仕えしているだけです。しかし、わたしたちは知っています。最善に仕えるというのは、わたしたちが関わる人々をイエス様のもとにお連れすることだということ。」 (I テモテ 2:4)

ですから、福音の内容、つまり神の恵みと罪の赦しのみ言葉を、罪の意識に悩み重荷の中であえぎ苦しみ続けている人々に宣言することもディアコニアです。また、カウンセリングはディアコニアの1つです。ルターはこう言っています。「兄弟姉妹同志、互いの会話と慰めはカウンセリングです。」

フィンランドでは教会を通して「使える電話」を30年以上受け付けています。電話が昼も夜もできるようになったのは、信徒がその奉仕に遣わされているからです。彼らはカウンセリングの電話サービスのために必要な講習をも受けます。また、家族のアドヴァイスのためには、クリニックのようなものもあります。そこで牧師あるいは他の職業の人が時間を決めて、夫婦間の問題、子育て、経済的問題等のために援助しています。

5. ディアコニア的教育の養成

フィンランドの国教会の立場から考えてみますと、ディアコニア教育もたくさんあります。人口の80%はルーテル教会員ですので、子供の宗教教育からお年寄りまでの活動があります。それは家族や学校や施設や軍隊などに影響を与えています。また、15歳の若者たちのほとんどは（たとえその両親が教会員でなくても）、教会を通して堅信礼を受けます。その教育コースの中に、聖書の中心的な教えから教会生活やディアコニア活動までの学びやデモンストレーションもあります。

フィンランドの教会における、現在のディアコノスとディアコニッセたちの働きは、次のようにまとめられます。

- ① 各教会の聖書教育を支えること
- ② ディアコニア行為を続けること
- ③ 信徒のためにディアコニア教育を施し、ディアコニア人を養育していくこと

それでは次は、ディアコニア人養育のための特別教育について記します。信徒たちは、現在住んでいる村や地域の困窮している人々のために、訪問したり支えたりしています。このディアコニア人は、教会から教育され、選ばれて派遣されます。このディアコニア人のために、教会は様々なコースを設定しています。（ボランティアをする人々のためのコースは、国や社会的グループなどが設定しています。）こうしたコースとは、訪問することやカウンセリングや法律などについてのさまざまな学びです。また、訪問することにおいて、諸問題の解決を見出すために相談相手もいるわけです。

ディアコニア専門の働き人は、自ら十分なディアコニアを実行することができません。ですから、信徒ができるディアコニアはいつも必要です。そればかりでなく、本来のディアコニアは信徒と直結しています。最近、フィンランドで行われている援助について例をあげます。例えば、親戚がいない場合、ある信徒は、退院する患者さんを迎え、

その家まで送ってあげることや、その後続けて10日間、毎日必要な手伝いをします。その一日2時間前後の奉仕の中身は、買い物をしたり、薬を取りに行ったり、共に時間を過ごすことなどです。同時に国からのホームヘルパー、看護婦、料理配達などのサービスシステムが設定されていますが、このような特別な資格を持つ人々は時間の限度があるために、教会からの「自由時間」を持つ援助者が大歓迎されます。もちろん、たまにしかディアコニアができない人のためにも様々な奉仕があります。

ディアコニアの求心力を考えますと、それは、教会の全てのメンバーによって同様の深い悩みや悲しみが理解され、みんなで助け合う経験を持つことでしょう。わたしたちから近い・遠いことと無関係に、人々の悩みや悲しみを知り、心の深い部分で感じることから行為が生まれるのです。神様は教会のためにいろいろな賜物を与え、クリスチャンを礼拝の恵みを通して遣わし、さらに善い行いに生きる人々と成長するように導いてくださいます。

イエス様は、人々の全体的ないやしとお世話を教えてくれました。また、財産の使い方、お金の使い方、権威の問題と解決の仕方などの教えもたくさん残されています。イエス様は、正しい生き方のために、謙遜な従い方をもわたしたちクリスチャンに教えてください（フィリピ2:1-5）。またイエス様は、「主の祈り」を通して、わたしたちの日常生活に対する主要な祈り方をも教えておられます。「主の祈り」は、天のお父様と人間との関係の中に「憐れみの心」を教えてください。信仰と愛の足りないわたしたちは絶えず、「主の祈り」の中にある小さな祈りをも覚えて、自分自身のため、隣人のため、またこの世のために、「御心がなりますように」「愛をください」「日々の糧をください」「罪の赦しをください」などのように祈れば、神の国が与えられます。

